

《自立支援教室「あけもどろ学級」》

自己を見つめ、よりよい自己決定ができる生徒の育成 ～生徒の実態に即した SEL と多様な体験活動を通して～

那覇市立若狭小学校教諭 平山 育代

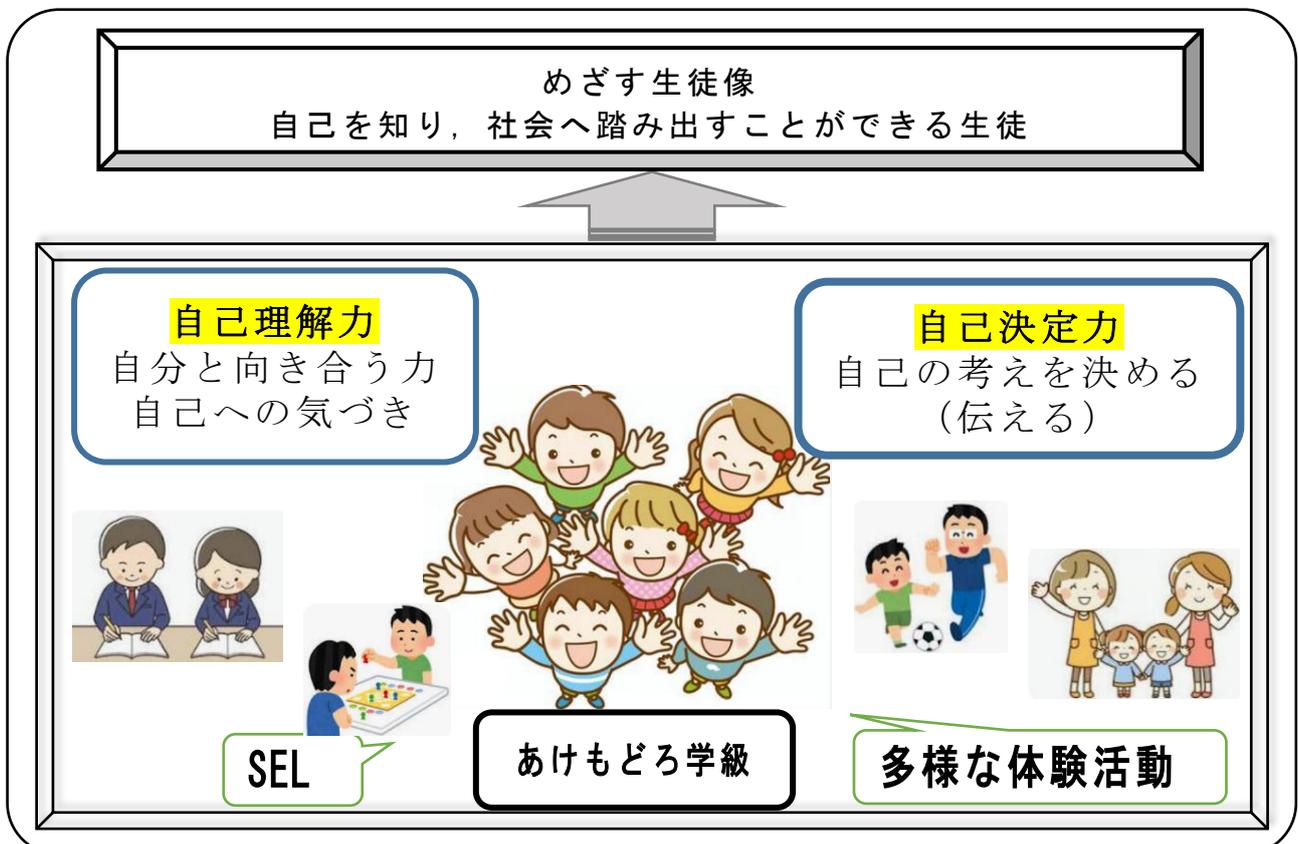
〈研究の概要〉

今年度の自立支援教室「あけもどろ学級」には、10名の生徒が入級している。あけもどろ学級を担当し不登校生徒と関わる中で、自分のことを決めることができない生徒やコミュニケーションをとることが苦手な生徒など、自己肯定感が低いと感じた。その中でも、「自己理解力」「自己決定力」に課題があると考えた。また、学校の様々な体験活動に参加することが難しいため、様々な体験活動に不安を感じ戸惑い挑戦することができない。

本研究では、社会的自立に向けて SEL 活動を取り入れ、自己を見つめ、自分で考え決める体験を多くすることで、生徒が安心して自己決定を行い、活動に参加することで、個々の自己肯定感を高めていけるよう支援を行った。また、生徒の興味や特性に応じた体験活動や交流体験を通して、様々な経験を積むことや他者と関わる機会を設定した。

その結果、生徒が自己を知り、他者と関わるのが楽しいと感じることができ、ステップで成功体験を積み重ねることで「自己理解力」「自己決定力」を育むことができ、自己肯定を高めることができたと考えた。

〈研究のイメージ〉



目 次

I	テーマ設定の理由	81
II	研究目標	82
III	研究仮説	82
1	基本仮説	
2	作業仮説(1)(2)	
IV	研究構想図	82
V	研究内容と方法	82
1	よりよい自己決定ができる生徒の育成	
2	社会性と感情を育む学び	
(1)	社会性と感情を育てる重要性	
(2)	社会性と感情を育む学び(SEL)について	
(3)	自立支援教室「あけもどろ学級」の活動	
3	職場体験を通して	
VI	結果と考察	85
1	あけもどろ学級の生徒について	
2	作業仮説(1)の検証 結果と考察	
3	作業仮説(2)の検証 結果と考察	
VII	成果と課題	90
1	成果	
2	課題	

《主な参考文献》

自己を見つめ、よりよい自己決定ができる生徒の育成 ～生徒の実態に即した SEL と多様な体験活動を通して～

那覇市立若狭小学校教諭 平山 育代

I テーマ設定の理由

近年、子ども達を取り巻く環境が大きく変化する中、子どもの多様化が進み、様々な困難や課題を抱える児童生徒が増えている。そこで学校教育には、子どもの発達や教育的ニーズを踏まえつつ、個々の実態にあった教育が求められている。しかし、不登校の数はまだ増加傾向であり、不登校の要因は多岐にわたっている。その中で、「不登校児童生徒について把握した事実」（那覇市）のデータで1番多いのが、「学校生活に対してやる気が出ない」が16.6%、次に、「生活リズムの不調」が16.0%、「学業不振や頻繁な宿題の未提出」が12.0%、「不安・抑うつ」が11.1%であった。そこで、不登校児童生徒には、安心して学ぶ場の提供と人と関わる場が必要であると感じた。

那覇市では、心理的・情緒的不安が原因で登校できない子ども達に安心できる居場所を与え、自主性や社会性の育成と人間関係の改善を図り、社会的自立を促進するために、教育委員会教育相談課に自立支援教室「あけもどろ学級」を設置している。

私が受け持った学級にも、不登校になった児童がおり、本人に聞くと、「なぜ行けなくなったのか原因がわからない」や、「友達と上手く付き合えない」と言う児童がいた。自分が何をしたいのか、自分がどうしたいのかなどの自分を知ることへの課題があると感じた。そこで、社会生活に必要な今の自分を知る「自己理解力」や自分でよりよい選択ができる「自己決定力」が必要であると考えた。

不登校児童生徒は、社会的自立に向けた学びと、環境づくりが大切である。児童生徒が自己を見つめ、自己をコントロールし、他者との交流から、対人関係を築くことが課題であると感じる。そのため、これからの時代を生きていく上で必要不可欠である非認知能力を育むことが一層必要になってくる。個々の実態に応じた支援を行うと共に、一人一人が非認知能力を高めれば、安心して未来に向けての選択へとつながると考える。

また、不登校生徒と関わる中で、自己決定の経験が少ない・できないと感じた。人と関わるのが少ない・体験活動経験が少ないことで、何に困っているのか・何をしたいのかなど自分で決めることができない。こうした状況を踏まえ、様々な体験を通して人と関わり、何がしたいのか、自分で何をするのかを考えるような活動を取り入れることが大切であると捉える。

以上のことから、本研究では2つの方策に取り組む。1つ目は、生徒の特性に応じたソーシャル・エモーショナル・ラーニング（以下 SEL と表記）を取り入れ、自己を見つめる活動をしたり、他者と関わる機会を設定したりすることで社会的自立を養う。2つ目は、職場体験や、農業体験、様々な体験活動から生徒が安心して活動を行うことで、多くの人と関わりを持ち、自己決定を行うができるよう支援を行う。このことを受けて支援の工夫を行うことで、不登校生徒が「自己理解力」と「自己決定力」を育むことができるだろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

自己を見つめ、よりよい自己決定ができる生徒を育成するために、実態に即した SEL や多様な体験活動などの実践を通して研究する。

III 研究仮説

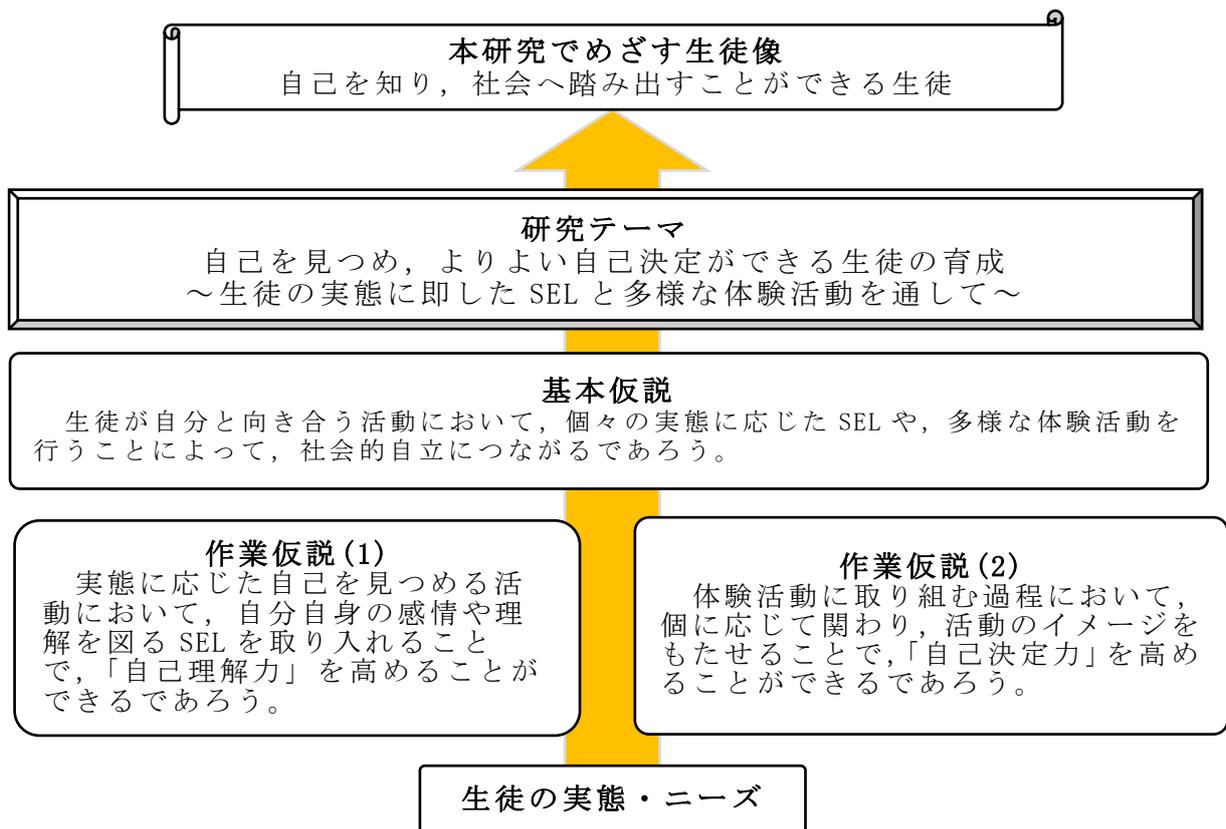
1 基本仮説

生徒が自分と向き合う活動において、個々の実態に応じた SEL や、多様な体験活動を行うことによって、社会的自立につながるであろう。

2 作業仮説

- (1) 実態に応じた自己を見つめる活動において、自分自身の感情や理解を図る SEL を取り入れることで、「自己理解力」を高めることができるであろう。
- (2) 体験活動に取り組む過程において、個に応じた関わり、活動のイメージをもたせることで、「自己決定力」を高めることができるであろう。

IV 研究構想図



V 研究内容と方法

1 よりよい自己決定ができる生徒の育成

生徒指導提要(2022) 1.1.2 生徒指導の実践上の視点(3)自己決定の場の提供には、「児童生徒が自己指導能力を獲得するには、(中略)自ら考え、選択し、決定する(中略)体験が何より重要」とある。自己指導能力とは、自分で考える・判断する・選ぶ・決めることで自分の意思で行動することである。児童生徒の自己指導能力を育

むために集団生活の中で“自己決定”の体験を積み重ねる“自己決定の場の提供”が必要不可欠であると考えます。しかし、自己決定の場だけを提供しても、不登校生徒はとまどい決めることができない。春日井（2022）は、「自己決定をするために大切なことは、自己決定を促す教員（大人）との関係性ができていること。そして、自己決定の場が安心できること」と述べている。また、「子どもの自己決定のために『日常生活の中での小さな自己決定+大人の応援』が大切になる。」とある。「『大人の応援』の『応援』とは生徒の自己決定を支えるための大人の関わりのこと」とある。さらに、「伝える前に『聴く』ことから始める。その子自身の思いや願いを大事にして関わること」とある（図1）。そして、「提案するときは、その子の思いを丁寧に確かめながら関わる。児童生徒が自分で選んだり、決めたりできる提案の工夫をすること。また、児童生徒が選択した『思い』を否定せず受け止めること。そのために、教師（大人）が焦らないで自分自身で考える時間をつくる（待つ）ことが大切である」とある。



図1 子どもの“自己決定”のために（春日井氏の「不登校の理解と支援講座」を参考に筆者作成）

2 社会性と感情を育む学び

(1) 社会性と感情を育てる重要性

山田（2020）によると、「長年、子どもの対人関係能力の低下や未熟さが指摘されている。背景には、子どもを取り巻く環境の変化や、社会性を身に付ける機会が減少していることが挙げられる。」と述べている。家庭内に目を向けると、核家族化や共働き世帯が多くなっていることから、学校から帰宅した子どもが1人で過ごす時間が少なくなる。また、友達と過ごしていても、背中を合わせてゲームをしている状況が見られる。そして、「キレる」子どもや、「相談しない・できない」子どもも増えている。感情のコントロールが上手く出来なかったり、感情を過度に抑制しすぎたりしていると考えられる。相手の気持ちを適切に認識することが難しくなっていて、状況把握が難しいため、その後の対応策を考えることができなくなってしまうと推測する。どのように相談したらいいのかわからないといった、自分の気持ちを伝えることへの課題もある。不登校児童生徒の多くは、自分の気持ちが分らないや、どう表現したらいいのかわからないと言ったことが挙げられる。自分の感情を理解し、どうしたいのかを自分で考え、伝えたり、行動に移したりすることがこれからの時代には必要不可欠であると考えられる。

(2) 社会性と感情を育む学び（SEL）について

ソーシャル・エモーショナル・ラーニングとは（Social Emotional Learning）：社会性と情動の学習（以下 SEL とする）である。「SEL」は「自己の捉え方と他者との関わり方を基盤とした，社会性（対人関係）に関するスキル，態度，価値観を身に付ける学習」（小泉，2011）と呼ばれる心理教育プログラムの総称である。

山田（2020）は、「不登校の要因の中で，自己肯定感の低下や子どもの対人関係能力の低下や未熟さが指摘されている。そこには対人関係能力を含めた社会性を身に付ける機会が減少していることが挙げられる。また，悩みや不安を話せなくなり不登校になるケースもある。」と述べている。生徒指導提要 1.3.3 ガイダンスとカウンセリングで「場合によっては，社会性の発達を支援するプログラム（ソーシャル・スキル・トレーニングやソーシャル・エモーショナル・ラーニング等）などを実施します。」と示されている。そこで，「社会性」と「感情」を育むために，SEL を取り入れ「自己理解力」と「自己決定力」を高めたい。

あけもどろ学級の生徒と関わる中で，自分の思いや考えを上手く伝えることができないことや，他者とコミュニケーションをとることが苦手で，他者に関心がなく，生徒同士の関わりがないことが課題と感じた。また，不登校児童生徒に共通しているのが，自分の気持ちを言葉にできない・相談できないことであると感じた。そこで，SEL で身に付けたい「社会能力」のうち，あけもどろ学級の生徒は，特に「自己理解力」と「自己決定力」を身に付けることが，社会的自立への一歩につながると考える（表 1）。あけもどろ学級の活動の中で，SEL を取り入れ，「自分と向き合う力」を育む。自己の感情を言葉にすることが難しいため，ワークシートに何をしたいのか，今感じていること，どう感じたのかななどの感情を書いて，「自分の気持ち」を意識することから始める。

表 1 SEL で育成を目指す 5 つの社会能力 小泉（2024）を参考に筆者作成

自己理解力 自己への気づき	他者理解力 他者への気づき	自己コントロール力	対人関係力 対人関係	自己決定力 責任ある意思
自分自身の感情や能力について理解する力	他人の感情や立場を理解し，多様な人がいることを認識できる力	目標達成に向けて自分をコントロールし，失敗や挫折を乗り越えて取り組もうとする力	周囲との人間関係において，健全で協力的な人間関係を築き，維持する力	選択肢を吟味し，他者の考えを尊重しつつ，責任を持って自己決定する力

(3) 自立支援教室「あけもどろ学級」の活動

あけもどろ学級は，月曜日から金曜日まで活動を行っている。朝の会では，それぞれが今日のめあてを決めて，個人日誌に記入し「自己理解力」を身に付ける（図 2）。リラックスタイムでは，カードゲームやボードゲーム等を通して学級の生徒とコミュニケーションをとる。スタディタイムでは，その日の学習内容を自分で決めて，学校の課題や自主学習，読書等の学習に取り組むことで「自己決定力」を身に付ける。帰りの会では，それぞれが 1 日の振り返りを行い，がんばったことや出来たこと等を記入することで「自己理解力」を身に付ける。また，毎週木曜日は，教育相談課に通っている児童生徒と一緒にバドミントンや卓球等の様々なスポーツ活動

を行っている。あけもどろ学級以外の児童生徒と関わり、小集団で活動することで「自己理解力」を身に付ける。金曜日は、チャレンジ登校とし、学校へチャレンジして登校してみる。行けそうにないなら、あけもどろで活動を行う。自分でどうしたいかを決める機会を多く持ち、「自己決定力」を高めていく。

3 職場体験を通して

文部科学省 キャリア教育 中学校 職場体験ガイド 第1章 職場体験の基本的な考え方 2.職場体験の必要性には、「職場体験には、生徒が直接働く人と接することにより、実地的な知識や技術・技能に触れることを通して、学ぶことの意義や働くことの意義を理解し、生きることの尊さを実感させることが求められている。

また、生徒が主体的に進路を選択決定する態度や意思、意欲などを培うことのできる教育活動として、重要な意味を持っている。」と示されている。(3) 職場体験の教育的意義の中の、2.新たな自分を発見する場では、「生徒が自己の個性や適性を把握し自己理解を深めていく上で、様々な体験・経験を積み重ねることは、(中略)自分が役立つ存在であることを知ることができたり、自己の新たな可能性を見出したりする場合も少なくない。(以下略)」と示されている。そこで、職場体験を行い体験や経験を積み重ねることで、自分が何をしたいのか等を決める「自己決定力」を高めることができる。と考える。

VI 結果と考察

1 あけもどろ学級の生徒について

今年度、あけもどろ学級には10名の生徒が入級している。その内9名が中学3年生と言うこともあり1学期は、生徒一人一人とコミュニケーションを取るために、ゲームなどを取り入れ、実態把握を行った。2学期は、進路の関係もあり自己決定ができるよう関わりを持った。今年度、半数の生徒が10月以降に入級。よって、5月までに入級した生徒を中心に事例を抽出する。

2 作業仮説(1)の検証

実態に応じた自己を見つめる活動において、自分自身の感情や理解を図るSELを取り入れることで、「自己理解力」を高めることができるであろう。

あけもどろ学級 個人日誌
令和 年 月 日 曜日

昨日の就寝時刻	今日の起床時刻	今日の入室時刻	交通手段	朝食◎○△	体調◎○△
時 分	時 分	時 分			

今日の活動

時間	やること(計画)	振り返り
9:00~9:10	朝の会	😊
9:10~10:00	チャレンジタイム	🌞
10:00~10:10	リフレッシュタイム	🌞
10:10~11:00	チャレンジタイム	🌞
		😊 もりもり食べよう

何をやるのか (自己決定力)
○の中に気持ちマーク (自己理解力)

自分の気持ちを言葉にしてみよう(気持ちマーク)

とてもいい感じ 😄	いい感じ、よくてきた。😊	大丈夫 OK 😊	上手くない、逃げ出したい気分、いいか教えて。😞	困っている、最上級に困っている。泣きたい気分、どうしたらいいかわからない。😞
-----------	--------------	----------	-------------------------	--

今日の感想!! 教えて~

自己理解力

図2 個人日誌

【結果】

あけもどろ学級では、朝の会で、日誌を記入し、今日のめあてを自分で考え何を学習するのかなどを決める。帰りは今日の気持ちやできるようになったことを振り返ることで自己理解力を高めることができた(図3)。毎週木曜日に実施している相談チームとのスポーツ活動に参加し、同年代の生徒との関わりを楽しむことができ、その後の振り返りをみんなの前で発表することができた。また、9月24日(水)から26日(金)に行われた、教育支援センター等連絡協議会主催のいきいき自然体験キャンプに生徒3名が参加した。2泊3日、他の自治体の自立支援教室の生徒と宿泊をし、様々な活動を共に、交流を行った。いきいき自然体験キャンプ前は、不安もあったようだが、Aさんから「去年は先輩が色々教えてくれたから、今年は自分が教えてあげたい。」と自分で考えて主体的に行動することができた。自分から積極的に話をすることはほとんどなかったが、他の教室の生徒が関わってくれたことで、同年代の友だちと関わるのが楽しむ姿が見られた(図4)。また、他の教室の小学校5年生の児童のお世話をする姿が見られた。

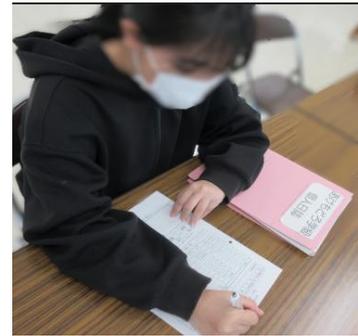


図3 個人日誌の記入の様子



図4 渡嘉敷キャンプの様子

表2 Aさんの実態と目標

生徒	実態	目標
Aさん(中3) [入級:5月初旬]	<ul style="list-style-type: none"> ・小6夏休みから別室登校を経て不登校。 ・主たる理由:不安等情緒的混乱。 ・前年度定期テストは学校の別室で受験。行事は見学。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事になるべく参加する。 ・コミュニケーション力を身に付けたい。 ・自分の意見を伝えられるようにしたい。

表3 Aさんの事例

Aさんの様子	教師の手立て
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いや考えを伝えることが苦手。 ・質問しても頷いたり首を傾げたりする。 ・嫌な時や、できない時は固まってしまう。 ・表情が変わらない。 ・生徒同士のコミュニケーションを取れない。 ・大勢の人がいる場所が苦手。 ・登校は、金曜日のチャレンジ登校とテスト。 ・気持ちが伝えられず、その場で固まる。 ・登校時は、別室での活動のみ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の活動で、選択肢をいくつか用意し、自分で決める体験をつくった。 ・振り返りを書く際に、昨日の日誌を読み返し、昨日の自分と比べ自分を知ることを行う。 ・振り返りを書くときに、「今日は〇〇をととても頑張っていたね」など本人ができるようになったことを伝えた。 ・活動する際に固まって動けなくなった時は、本人が考える時間をつくり待って、聞く。

【Aさんの振り返り】入級して変わったこと

- ・「週1回学校へ行く」「コミュニケーションを取る」という目標を立てることができた。
- ・学校で行われる漢字検定を受けるために、午後まで学校に残りみんなと同じ教室で試験を受けることができた。
- ・様々な交流会に参加することができた。
- ・初めての人とも交流することができた。



【Aさんの変容】

- ・朝の会で、今日のめあてを自分で決めて取り組むことができた。
- ・めあてや振り返りを、みんなの前で発表することができた。
- ・学校からの課題に取り組む際、自分で計画を立て、提出期限内に提出することができた。
- ・生徒同士が関わる機会を設けたことで、笑顔が増え、感情を言葉や表情で表すことができるようになってきた。
- ・苦手なことや改善したいことを目標にして頑張った自分を認めることができた。
- ・集団の中で、自分から動くことが苦手だったが、何をしたいのかを自分から伝えることができるようになった。

【考察】

日誌の中にめあてや振り返りを取り入れたり、何をするのかを自分で計画を立てたりしたことで、自分の思いや考えを表現できるようになった。その際、自分が何をしたいのか、何ができるのかを知ることで、自分で考え行動することができるようになったと捉えられる。活動後も、どう感じたのかを書くことで「自己理解」に繋がったと考える。教師が個の実態を理解し、声掛けを行うことで、自分の今の気持ちを少しずつ考えるようになり、様々な活動を「楽しみ」「またやってみたい」と思えるようになったと捉えられる。他の生徒との関わりにも興味を持ち、なかなか自分から交流できなかった生徒が交流を楽しめる姿が見られた。事前に活動内容を伝えたことで、実際にやってみると「思っていたよりも楽しめた」「自分にもできた」と感じ達成感を味わうことができ「自己理解力」が身に付き、苦手な活動にもチャレンジしてみようという前向きな姿勢が見られるようになったと考える。

3 作業仮説(2)の検証

体験活動に取り組む過程において、個に応じて関わり、活動のイメージを持たせることで、「自己決定力」を高めることができるであろう。

【結果】

スポーツ交流会では、五色綱引きでのチームの作戦タイム後に、他の教室の生徒と話をしながら、作戦を実行していた。体験活動交流会では、自分の好きな体験活動に参加し、様々な体験活動を他の教室の児童生徒と、作品を作り交流を楽しむことができた。活動展示報告会では自分たちの作品を展示し、大勢の前で学級の様子を紹介することができた。

また、場体験などの活動を4回実施した。県立美術館では、学芸員さんからサービスの仕方や仕事を体験させてもらった(図5)。こども園では、初めは園児との関わりに戸惑っていたが、教師が声をかけ、困った様子がみられると「どうしたの?」と寄り添い、「担任の先生に質問してみたら」と声をかけるなど、どのように関わるかを自分自身で考えて、園児と楽しく活動している姿が見られた(図6)。



図5 職場体験での活動の様子



図6 職場体験の様子
(こども園にて)

表4 Bさんの実態と目標

生徒	実態	目標
Bさん(中3) 〔入級：5月上旬〕	<ul style="list-style-type: none"> ・小6教室に馴染めず別室登校，中1別室登校経て夏頃から不登校。集団，学習に抵抗あり。 ・主たる理由：身体の不調。 ・前年度英語のみ定期テストを別室受験。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校の課題をやる。 ・英語検定を受ける。 ・生活リズムを整え，集団行動でできるようにしたい。

表5 Bさんの事例

Bさんの様子	教師の手立て
<ul style="list-style-type: none"> ・入級当初は，集団や活動などに強い抵抗を示す。 ・大人数が苦手で，活動に参加することに抵抗を示す。 ・学校の課題は好きな教科以外，ほとんど取り組んでいない。 ・相手の気持ちを考えての発言が苦手で，自分の考えを一方向的に伝える場面も見られる。 ・学校はチャレンジ登校日の午後に登校。学級担任との会話はなく，学級担任とは，必要なこと以外は話をしない。 ・自分のがんばりに自信が持てない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初めての活動の不安が強いため，前年度の写真を見せ，何が不安なのかを聞き，どうするかを一緒に考える。 ・学校の課題を「今日はどこまでする」と本人の思いを聞き、自分で決めるように声をかける。 ・できたことに対して否定的な言葉を使うので教師から肯定的な言葉を使い出来たことを褒める。

【Bさんの振り返り】入級して変わったこと

- ・あけもどろ学級の行事やスポーツ等の活動に参加できるようになった。
- ・最初の時よりも，楽しんで活動に参加できるようになった。
- ・休まずに来所できるようになった。
- ・学校の課題に取り組むことができるようになった。
- ・活動に参加する前は嫌な気持ちだけど，参加したら「楽しい」気持ちに変わった。



【Bさんの変容】

- ・集団活動に参加することを拒否しなくなった。
- ・活動に参加した後，否定的な言葉ではなく「楽しかった」など肯定的な言葉を言うようになった。
- ・学校からの課題に抵抗なく，自分で計画を立て，提出期限内に提出することができた。
- ・週1回登校することができ，課題に自分から取り組むことができるようになってきた。
- ・苦手なことや改善したいことを目標にして頑張った自分を認めることができた。
- ・できるようになった自分を認め，肯定的な言葉が増えてきた。

【考察】

様々な体験活動を行った際に，個に応じた関わりや声掛けを行ったことで，自分の思いや考えを表現できるようになったと考える。また，体験活動や交流活動前に話を聞いて活動のイメージを伝え，体験を繰り返し行うことで，自分で決めることが少しずつ自信につながり，活動や他者との関わりを「楽しみ」「またやってみよう」と思えるようになったと捉える。さらに，他の生徒との関わりにも興味を持つことができたことから，「自己決定力」が身に付いたと考える。その際，緊張から「嫌だ」と思いながら活動に参加していたが，実際にやってみると達成感を味わうことができたことで「自己決定力」が身に付き，苦手な活動にもチャレンジしてみようという前向きな姿勢が見られるようになったと捉えられる。

表6 Cさんの実態と目標

生徒	実態	目標
Cさん(中3) [入級:5月中旬]	<ul style="list-style-type: none"> ・小6の1月頃から不登校。 ・主たる理由:集団が苦手。休んだら行けなくなった。 ・前年度定期テストは学校の別室で受験。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で帰宅できるようにしたい。 ・週1回登校。テストを受ける。 ・コミュニケーションをとる

表7 Cさんの事例

Cさんの様子	教師の手立て
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えや思いを伝えることが苦手。 ・質問しても頷いたり首を横にかしげたりする。 ・返事をするときは「忘れた」「覚えてない」又は、単語で答える。 ・表情が変わらない。 ・登校時は、別室だけの活動。 	<ul style="list-style-type: none"> ・質問をする際、「なぜ？」と考えを伝えるような質問にした。 ・体験活動をする際、「〇〇さんと一緒にやってみて」と他者と関わるような場をつくった。 ・活動するときに、「次はどうしたい？」と自己決定ができるようにあせらず待つことを意識した。

【Cさんの振り返り】入級して変わったこと

- ・合唱コンクールや運動会などの学校行事の見学ができた。
- ・学校の別室で、生徒同士でコミュニケーションをとることができた。
- ・学校行事以外でも、他の教室の生徒と交流し楽しめるようになった。
- ・自分の意見を少しずつ伝えたり、表現できたりすることができるようになった。



【Cさんの変容】

- ・自分一人の活動から、友だちと一緒にやることが増えてきた。
- ・学校行事活動に参加できるようになり、感想を伝えることができるようになった。
- ・交流会では、他の教室の生徒と話し合いを通して、楽しく活動することができるようになった(図7)。
- ・ゲームなどの交流する場を設け、担当から声掛けや関わり方などコミュニケーションを多く取り入れたことで自分の感情を表に出すことができるようになった(図8)。

【結果】

人と関わるのが苦手な自分の気持ちが上手く表現できない生徒に、声掛けを意識して関わったことで、『自分で決める』ことができ、やってみたくが増え挑戦することができた。生徒が何に困っているのか、どのような関わりが必要かアセスメントし、生徒がイメージを持ち安心して活動に参加できた。振り返りでは、「体験活動でたくさんのお話を学ぶことができた」や「苦手なことに挑戦することができた」と肯定的な言葉を書いていた。また、人と関わるのが苦手な生徒が交流活動で他の教室の生徒と楽しく活動する姿が見られた。これまでテストと面談以外で登校することがなかった生徒が「学校の別室で〇〇さんと卓球した。」と同級生と交流したことを話してくれた。あけもどろ学級でのゲームなどでも、感情をほとんど見せない生徒が笑顔で「よっし」と声を出して気持ちを表現していた。



図7 スポーツ交流会の様子
(沖支援連連絡協議会主催)

【考察】

体験活動を行う際に、個に応じて関わり、話を聞き寄り添ったことで、安心して自己決定し活動に参加することができたと考える。これまで学校行事に強い抵抗があった生徒が「見学できた」と自分の頑張りを認めることができたことで、自己決定力や自己肯定感が高まったと捉えられる。また、生徒の振り返りから、肯定的な言葉が増え、自分で決めるなどの自己決定力がついてきたと考える。自分で決める経験を何度も行い、成功体験を繰り返すことで、「自己決定力」を高めることができたと考える。

入級生に「あけもどろに入級して自分自身は変わったと思いますか」の質問では、全員が「はい」と回答したことから、多様な体験活動を取り入れたことで、他者と関わり、目標を立て、多くの人との交流を通して自分の考えを持ち、どの行動するかを決めることができたと考える。

自分のことを知ることで、何が好きで何が嫌なのか。どんな時に、気持ちが落ちてしまうのか。その時に、どんな行動をとると良いのかを決めることができるようになったと考える。また、出来なくても、教師が声をかけて、前と今を比べできるようになったことを伝えると、表情が明るくなり、次に進むことができたと捉えられる。

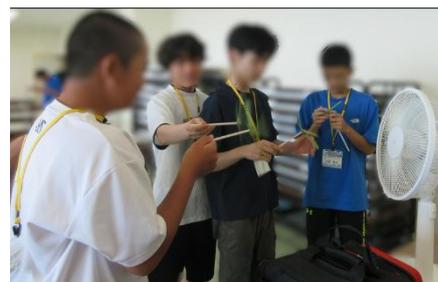


図8 渡嘉敷キャンプで別教室の生徒と交流する様子

Ⅶ 成果と課題

1 成果

- (1) SELを取り入れたことで、自分が出来ること苦手なことを知り「自己理解力」が高まった。
- (2) 「自己決定」ができるようにするために、個に応じた声掛けや、関わりを行い自己決定を促すことで、自分の立てた目標を達成する喜びを味わうことができた。

2 課題

- (1) SELを行う際に、自分の気持ちを言葉にすることが難しい生徒に対して、言葉や絵文字以外の表現方法を準備しておくことが必要。
- (2) 「自己決定力」を高めるために、個に応じた選択肢をいくつか準備しておくことが必要。

《主な参考文献》

『生徒指導提要』

文部科学省 東洋館出版社 2022年

『ソーシャル・エモーショナル・ラーニング（SEL）非認知能力を育てるフレームワーク』

渡辺弥生・小泉令三 福村出版 2022年

『対人関係と感情コントロールのスキルを育てる 中学生のためのSELコミュニケーションワーク』

山田 洋平 明治図書 2020年